

2026年度 早稲田大学大学院教育学研究科
博士後期課程 国費外国人留学生入学試験問題
[小論文] 【教育基礎学専攻】

解答上の注意

1. 解答用紙の所定欄に、受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名を必ず記入すること。
2. 解答用紙が複数枚配付された場合、ホッチキスははずさないこと。また、無解答の解答用紙でも提出すること。
3. 問題用紙は「2枚」（本ページ含む）、解答用紙は「1枚」です。必ず枚数を確認すること。

以 上

2026年度

早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程入学試験問題

〔国費外国人留学生入試〕

科目名 小論文 初等教育学（大泉）

問題 次の3つの設問に答えなさい。答えは別紙解答用紙に、「設問」番号を記した上で記入しなさい。

設問1 小学校学習指導要領解説図画工作編（2017年、文部科学省）に示されている、小学校図画工作科の教科の目標について解説しなさい。

設問2 次の文*）（下線出題者）を読み、後の問いに答えなさい。

チゼックの指導理念は、国内において戦後の美術教育運動をリードした「創造美育運動」を牽引する基本理念となっていた。1952（昭和27）年に久保貞次郎や北川民次が設立した「創造美育協会」（以降「創美」）は、戦後デモクラシーを背景として自由主義を喧伝し、解放主義による教育を実践した。この創美の考え方は、「子どもには生得的な創造力がある」とするものであり、子どもを大人の抑圧から解放し、既成の技術指導を排除して、創造力の育成を企図するものであった。子どもは、心理的な抑圧からの解放によって生得的な創造力を発現する存在とされた。

この創造主義における子どもの捉えに対し、1959（昭和34）年に全国組織化された「新しい絵の会」では、子どもの現実認識を核とする生活リアリズムを打ち出した。認識主義においては、生活環境との相互作用の中で形成される社会的存在として子どもを位置づけた。よって、創造活動においても、関係性の中で形成される知識や技能を重視する傾向があった。その後の1960年代を中心に展開された創美と「新しい絵の会」をめぐる「創美論争」では、子ども観を争点とした具体的な論議は展開されなかったが、個と社会の振幅の中での子ども観をめぐる二項対立の図式は、美術教育において今日まで持ち越されていると言えるだろう。

*）水島尚喜「子ども観の変遷と美術教育」、神林恒道・ふじえみつる（監修）『美術教育ハンドブック』、三元社、2018年、pp.85-86

問 下線部「個と社会の振幅の中での子ども観をめぐる二項対立の図式は、美術教育において今日まで持ち越されていると言えるだろう。」とあるが、「二項対立の図式」とはどのようなことを指し、「今日まで持ち越されている」とする状況とはどのような状況を指すのか、具体的に説明しなさい。

設問3 日本の初等中等教育における美術教育の課題と展望について、次にあげるキーワードをすべて用いて具体的に論述しなさい。（キーワードを用いる順番は問わない）

創造性 身体 芸術による教育 視覚の恒常性

以上

